

ちよつといひ話

～架け橋～

橋という言葉イメージしてみると一般的には川に架かる橋を思い浮かべる事でしょう。ここでは極楽への架け橋はどうなっているのか考えてみましょう。極楽へ行く爲には三途の川があり必ず渡らなくてはなりませんし、幾つかの関所を通らなくてはなりません。キーワードは真言です。真言が架け橋になって下さいます。要するに真言とは事に応じて必要欠くべからざるものです。即ち物事の成就を願う時には必ず真言を称えると言う事です。念彼観音力を頂くのもそうですし、南無大師遍照金剛と称え、南無阿弥陀佛と申すのもそうです。ですがその力は個々の努力精進に因って大きく異なります。要するに我々が使う道具と同じ様に、使う方の上手下手は修練によって違ってきます。積み重ねの修練が大事なのです。真言の口稱、称名念佛が浄土に渡る架け橋ですが、煩惱に包まれている我が身なるが故に、佛果菩提を得る爲には相当の努力を要しなければ、なかなか安心決定する事が出来ません。極楽へ橋を架けるのも我、渡るのも我なり、難行苦行です。その為佛様が我々に救いの手を差し伸べて下さいました。その手が**発願**なのです。では発願とは何か、法然上人は「ただ一向に念佛すべし」と申されました。称名念佛のみ、「下手の考え休むに似たり」です。空海大師は真言の口稱により**速得解脱**できると申されました。虹の架け橋になります様に一途なり。

善入院油掛地藏尊